



岡 隆一

一般社団法人東北経済連合会 参与

研究はいきもの

理系の研究では、成果は客観的なものといわれます。一方で、その成果を得るまでの過程は属人的ともいわれます。重要な結果は、その分野の教科書にも書かれ、属人性が薄くなります。ただ、教科書の版が変わると、内容が一新されることがあり、研究成果が長く残るものは少ないようです。その意味で、研究の成果は「いきもの」で寿命があります。これと類する別の話を少し書きたいと思います。

学会というのは、類似の研究を行っている人たちの集まりです。そこでは、長い期間に渡って、各人が研究成果の発表や議論などを行っている人的な交流も盛んなところですが、そして「誰々さんは個性的な研究をしているな」という事を互いによく知っています。

研究を進めていくには、なにがしかのその個人研究者独自のアイデアを必要とします。このアイデアは、その個人の内在的なところから発生し、極めて属人的です。一方、工学でも理学でも、その成果の有効性、現実性は、自然に対し実験で問いかけ、その反応によって、主観的な個性が客観的に評価されます。

さて、研究者が定年を迎えたり、または、研究分野を変えたりします。その結果、よく知った方が学会からいなくなります。そのとき、その人に固有に付属していた研究風景はどうなるのでしょうか。寂しいことですが、その人がいなくなることで、その人の関係している研究が消滅する場合があります。

研究成果は、本来属人的でないもので、その成果を上げた人がいなくなっても依然としてその成果に基づいた研究が続くと思われがちです。しかし、実際には、成果には耐用年数といいますが、寿命というものがあり、そうとはなりません。つまり、ある成果の“耐用年数”とその“普遍性”が、実はその人の存在によってのみ風景として支えられていた場合、その人が定年などで学会から離れたとき、その風景自体の消滅が起こり得ます。

その人の成果の客観的な内実が、明確になる瞬間の突然の訪れです。若い時は感じなかったのですが、私自身も歳を重ねると、研究風景の変化が自他ともに気になります。

そして、学会には、新人が入り、同じような経過の繰り返しが始まり、研究風景の生成と消滅が途切れもなく続いていきます。

そして、これらから浮かび上がってくる問いは、どのような成果が長く寿命を持つかです。その答えが、突然突きつけられる機会があるのです。結論として、研究は「いきもの」であることを改めて感じさせられます。

(会津大学 理事長兼学長・おか りゅういち)